

子どもと家族と学校と

③

『不登校は、学校が悪い？ それとも、家族が悪い？』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美



学校生活のなかで、いじめ、暴力など気がかりな問題は後を絶たない。そして、あいかわらず、長期欠席をしている子どもたちも多い。

その不登校の支援をされていて目にすることは、学校側と家族がうまく協力できていないことだ。

学校は、家庭教育をもっとしっかりしてほしいと考え、家族は学校にさまざまな思いや要望をもっている。

今回は学校と家族との関係調整の中で考えた不登校支援について記してみる。



派手な家族？！

「遊び人風のお父ちゃんですわ～髪の毛を茶色くして、ラフな格好です～お母ちゃんはいつもミニスカートです。生徒さんは中学二年生ですが、大人っぽく見えます。母親と二人で歩いていると姉妹みたいですよ。まあとにかく目立つ両親ですね」

リナの家族は、学校の先生方からすると、派手に映っていたようだ。

リナが抱える問題は不登校。二学期が始まった九月上旬から、長期欠席をしている。すでに四カ月を経過した。

中学生になってからのリナは、熱心にクラブ活動を続けていたが、レギュラーに選ばれなかった頃から、だんだん元気がなくなっていった。定期試験の成績もトップクラスから、まん中よりも下に低下し、思い通りに進まないことが重なっていた。

家のごたごたも同じ時期だった。自営業の父の仕事をめぐって意見の食い違いがあり、両親はもめているという。

子どもが不登校になっているのは、家族に問題があるから再登校できないのではないか。家族関係を修復して再登校に向かうには家族療法が適しているということで、学校から当オフィスを紹介された。

家族療法は『問題がある家族』を治療する。そう誤解されて捉えられているが、実際は、『家族が協力をする』ことで問題解決をするので家族療法という名称なのだ。

学校が家族療法をすすめたわけは、母が、家からいなくなったことにあった。実際、リナの母は、しばらく実家に戻っていた。夫婦の対立から体調を崩し、実家で養生していたのだ。

子どもが不登校の時に、母が自宅を空けて実家に帰っている。よっぽどの事情

があったのだろうと受け止める人があるだろうし、一方、やっぱり家族に問題があると受け止める人もあるだろう。



初回面接

さて、そのような事前情報の中で、カウンセリングの当日、初回面接には、親子三人でやってきた。三人とも髪の毛が金髪に近い茶色だ。

学校に行かないのだからと、リナも髪の毛を染めている。しかもきちっと髪型がきまっている。整えるのに三十分以上かかるというのも、うなずける。手にはマニキュア、眉毛を細く整え、メイクをしている。身長は母より高い、大人っぽく見えるが、時折見せる表情はまだまだあどけない。

確かに見た目は派手だが、三人そろって面接にやってきているところからすると、まとまって行動できているのではないか。良いスタートが切れている。

「いますぐに学校に行くことは望んでいないけれど、いつか、もどることができれば良いなと思っています」父も母も同じような考えを持っていることもわかった。

カウンセリングに来たのは初めてというリナは、口数は多くないが、日記を書くのが好きだという話がでたので

「良かったら、その日に思ったことを、ノートに書いてみませんか」と、すすめるとニコリとうなずいて、書いてくると返事が返ってきた。

リナとの関係も少しずつ築くことができた。



もっと学校がかかわってほしい

リナの家族が学校に対して、感じていたことは、成績優秀だったリナが、成績が低下し、元気がなくなっていったにもかかわらず、学校側は、あまり手をさしのべてくれなかったと考えていた。もっと早く、学校側が対応してくれていたなら、ここまで欠席が長期化しなかったのではないか、進学指導の勉強が中心で、ついていけない生徒のフォローや困っているときにかかわってくれないのと感じていた。

問題がこじれてしまうと、家族は学校に責任を求めたくなり、学校は家庭に問題ありだという姿勢を強めていく。そのような体制に陥ると物事は進展しない。不登校支援の場合は、学校と家族が子どもの再登校に向けて、いかに協力する体制を築けるかどうかが重要である。

まずは、その体制づくりから調整していくことになった。



学校訪問

CON のカウンセリング支援の特徴の一つに『カウンセラーによる学校訪問』がある。それは、在籍している学校に行き、子どもさんの関係者とお会いして、情報交換し、その後の連絡をとりあう道筋をつくっていく。

もちろん、ご家族にもその目的を説明し、了解を得て、学校訪問をしている。学校の先生方にお会いして、クラブや教室での子どもさんの様子などをおききして、関係者の話を総合的にあわせていくと、子どもさんの理解を深めることになる。

また、学校訪問では、学校の内規を把握することも目的としている。

それぞれの学校で、教えていただける

範囲で、どのようなルールが存在しているのかの情報収集をする。それは、子どもさんやご家族のモチベーションと、再登校する場合のタイミングをうまくあわせていくために重要な情報となる。

リナの学校の制度として、長期欠席であったとしても、三年生に進級することができる。つまりこのまま学期末まで欠席をしても、問題はなく、本人と家族が望むのならば三年生に進級できるという内規を提示してもらうことができた。

高校生の不登校のように、あと、何日休んだら単位がとれない、留年になるかもしれないなどのしぼりがないので、あせらずに再登校にむけて準備をする環境下にある。

学校側がなかなか手をさしのべてくれないと母が言っていたが、その事情は担任と話をすることでわかってきた。

特にトラブルがあったわけではないが家庭訪問をしても、リナは話さずにずっとだまっているし、電話口にも出ない。訪問することがかえってリナへのプレッシャーになるのではないかと判断し、訪問を控えているためだった。もちろん、家族の希望があればできるだけ取り入れたいと考えていることも伝えられた。

本人の特徴としてわかったこともある。リナは、授業ノートはかなり几帳面に書いていることだった。相当時間をかけて書いているようだ。教科担任の先生もその様子を知っていた。

学校側の情報やご家族の話をもとめていくと、少しずつ全体像がつかめていく。

その後の面接では、過去にどのようなことがあったのかの話よりもこれからどうなっていきたいのか、どんな家族だと

いいなと思うのかなどのお話を取りいれながら、面接が進んでいく。

両親のこれまでのことにはあまり触れずに、「これからどんな家族でありたいですか。今どんなことができますか」

今後焦点を当てた話題が中心になった。



修学旅行に参加したい

面接の時に、語られたことは、家においても仕方がないので、気分転換するために父が職場にリナを連れて行き、パソコンで数字を入力する仕事を手伝わせたという。

「正確に入力するので助かります」と話す。リナの几帳面さが頭に思い浮かんだ。

母は犬の散歩をリナといっしょに出かけ買い物に行き、夕食の用意やお菓子をつくったりしてゆったり、過ごしているという。

父が話す。

「これまで、この子は毎日夜中の3時ぐらいまで予習などの勉強をしていて、もうちょっとゆっくりしたら良いのにとおもっていたのです」

家族は、できるだけ休養をとること、リフレッシュできるような環境作りをしていることがとてもよくわかった。

しばらくすると、家族でスキーに行っているうちに、リナが「修学旅行は行きたいなあ」と口に始めた。

彼女のノートにも、修学旅行のスキーには、行ってみたいと書かれていた。

学校に行きたいとは言わないが、修学旅行には、行けたらいいと話したのだ。

そのころ、クラスのとちから、電話があり、自宅に来てもらって、いっしょにゲームをして過ごすことも増えていった。

春に予定されている修学旅行に参加するためには、中学三年生の新年度からの登校できていけば良いのになあというのが、家族が意識し始めていることだった。

「新年度までにどのようになっていたら良いと思いますか」

と家族にたずねると、

「規則正しい生活と、遅れている学習をかたづけていくこと、それに、髪の毛も黒くしないとイケないしね」

と、母がリナの髪の毛をさわりながら、話した。



新学期

中学三年生の新学期になった。

新しい学年の担任は女性の先生が担当することになり、出席しやすいとリナが考える授業からすこしずつ教室に入ることになった。出席できない授業科目の時間は学校側が準備した別室で自主勉強を続けながら、学校にいる時間を増やしていった。

自然な流れで再登校につながっているのは、リナがこの春休みに、ひとりで新幹線に乗って親戚の家まで行き、テレビ局の見学もして帰ってきたという経験が自信になっているのではないかと母は話した。行動力もついてきているようだ。

学校の各授業の連絡や調整は、担任の先生がリナと話し合いをする、そして学校と家族の間の調整を当オフィスが担当する、そのような役割分担もうまくなされるようになっていた。

その後リナは、念願の修学旅行に参加したものの、クラスの友達とけんかをしたのでそれほど楽しくなかったと話したが、修学旅行以降はすべての授業に出席するようになっていた。

朝起きてから、学校に行くまでの支度は、以前は三時間ぐらいかかっていたが、今では、一時間ほどで準備ができる。髪型のこだわりも以前のようなことはなくなった。生活の中でもこれまでと違うリナの様子を確認できるようになり、安定してすべて登校できているために面接終了を迎えた。



子どもが続けて学校を欠席し始めると、親の育て方や家庭環境、学校の協力姿勢、ここぞ問題だ！というものを見つけ出しなくなる。

だが、家族、学校は、それぞれがせいっぱいやれることをしてかかわってきている。その前提に立ったうえで、関係者がお互いに協力をする。その時点から何ができるのか、何をやめておいた方が良いのか、何をはじめたら良いかに着目すること、それらの視点を持って支援を続けていきたいと考えている。

